

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 西本陽一

西本陽一氏の博士学位請求論文「周縁化と宗教変化の社会的経験—北タイの伝統派およびキリスト教徒ラフ集団の事例—」は、中国・東南アジアにまたがって山地・丘陵に居住するラフ族の民族誌であり、主要な材料は北タイでの長期現地調査にもとづいている。論文は、近現代の国民国家体制の下、いずれの国家でも周縁化されたラフが、「伝統派」「キリスト教徒」という二つの異なる集団形成を通じ、近代のシステムに適応し抵抗し、集団的自己意識を維持するさまを論ずるもので、民族としての自己についての人々の定型的語り詳細に記録・分析されている。筆者は過去 10 年以上にわたり、フィールドワーク、現地資料と二次文献の渉猟、アメリカ系キリスト教宣教師団体についての文献研究を続けてきた。そこからこの浩瀚な研究が生み出された。論文の構成は、宗教変化について、また集団的歴史的経験の語りについて、先行する人類学的研究を批判的に検討する序章に始まり、ラフ族の概況を過去から現在まで論ずる第 2 章、さらにキリスト教徒ラフをめぐる 3－5 章、伝統派を扱う 6－7 章に続き、結論に至る。

論文の主要な貢献は 3 つにまとめられよう。第 1 は、東南アジアから中国南部に至る地域の少数民族中でもとりわけ周縁的位置に置かれ先行研究に乏しいラフについての、数少ない貴重な労作ということである。第 2 は、近代世界の周縁における宗教変化、キリスト教化の研究に新しい詳細な事例を付け加えたことである。第 3 は、自己についての定型的語りというテーマを巡り、人類学的研究に新分野を開いたことである。

ラフの多くは中国雲南省西南部とビルマのシャン州に居住する。近代の国民国家から見れば辺縁の地であり、中央政府の支配の浸透と抵抗、中国の国共内戦、独立ビルマにおける内乱などが続いて、外部者の学術的研究をほとんど不可能にしていた。1970 年代以

来ビルマ軍と少数民族のあいだの戦闘が激化し、多くのラフがビルマ側から北タイに逃れ定住するようになった。だがそこでも彼らは、無視され差別・搾取を受ける無国籍者・少数民族の立場を余儀なくされている。筆者西本氏はこうした人々の中に住んで調査を続け、国と国のはざまにある少数民族の不安定な暮らしと自己意識について重要な民族誌を完成させた。このことの学術的・社会的意義は大きなものがある。ラフの歴史について、そもそも一次史料は乏しいのだが、アメリカ系宣教師たちによる著作をはじめ利用できる文献を渉猟し、中国、ビルマ、タイにまたがるラフの過去の歴史をまとまった形で明らかにしたことも、重要な学術的貢献である。

近代世界の周縁における宗教変化、キリスト教化のテーマに関しては、まず、伝統的な精霊信仰を残すとされてきた「伝統派」とキリスト教徒との区分が、単なる保守と革新の対比なのではなく、いずれもが、近代がもたらす危機へのローカルな対応の異なる形態であること明らかにしている。そして、両派がともに合理化の側面と「合理」を超えたローカルで個別歴史的な面とをもつことを説いている。

本論文でとりわけ高く評価されるのは、筆者がラフの村で長期に暮らし日々会話を繰り返す中で収集した、ラフ自らがラフについて語る発言の集積であり、そこから個々の発話者の個別場面での意図や主観をも越えた共通の型を取りだしていることである。それは「ラフはだめな人々だ」という自嘲の語りであるが、筆者はその自嘲の効果と、基盤にある歴史的・社会的構造を明らかにし、語りの分析を通じてラフについてのきわめて有効な理解を提出している。クリシェとして繰り返される自分たちへの自嘲は、ラフに止まらず世界の多くの人間集団に見いだされるもので、そのことを意識的に研究課題として提示したことは、今後の人類学研究にとって重要である。

以上本論文は文化人類学と東南アジア地域研究の分野で、新たな貢献を成し遂げている。今後、20世紀の初めより1950年代までこの地で活動したアメリカ人宣教師たちの、未公刊の日記・私信、それに対するアメリカ本国伝道団体の反応などを、より詳細に研究すれば、周縁世界におけるローカルなキリスト教の発展を、さらに深く明らかにすることが可能となろう。だが、パイオニア的な研究の出発点として、本論文はすでに十分優れた成果を示している。したがって本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。